

IS Ω ~インフィニツ
ト・ストラトス オメガ
~

僧正

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

I Sは女性に起動できない。その常識を覆す存在が2人。1人は織斑一夏。そして
もう1人は――

デジモンの設定を使用したテンプレもとい、王道。みたいに書ければなと思います。
デジモン自体は出てきませんのであしからず。

目次

6話	5話	4話	3話	2話	1話	
ワンオフ・アビリティー	初戦	訓練	結果と今後	現状	出会い	プロローグ
—	—	—	—	—	—	—
57	41	33	23	14	7	1

プロローグ

インフィニット・ストラトスΩ

プロローグ

テレビ画面には2体の機体がせわしなく動き回っている。1機は銃撃を用いながらの弾幕で相手を牽制しながらも勝機をうかがう。もう1機のほうはと、相手の銃弾幕に対し、ブレード1本という常軌を逸した装備である。弾道を先読みし、時には弾丸をいなし、時にはブレードで防御するなど、さながら人間業とは思えぬほどの技術とセンスを駆使しながら相手との距離を確実に詰めていく。

一般的な視点から言うならば、圧倒的に前者、銃撃を用いた機体のほうが有利であろう。しかし、この一般という言葉は後者の機体には当てはまらない。なぜならば、その機体の搭乗者である彼女は、前回のこの大会においてそのブレード1本という装備のみで勝ち抜いたこの世界最強の女、ブリュンヒルデなのだから。

次第にブリュンヒルデが相手との距離を縮め、そのブレードの間合いに相手を捉えかかる。相手もこのままでいいないと後退しながら接近武器を取り出し、銃撃で対応す

る。だがその一瞬の対応が相手の命取りとなる。並みの者ならばその程度、隙にもならない僅かな合間をブリュンヒルデは見逃さなかつた。機体のスラスターからエネルギーを放出し、それを一瞬で取り込み圧縮させ、それをさらに放出する。

『瞬時加速（イグニッショーンブースト）』と呼ばれるそれは、機体を爆発的に加速させる代わりに直線的な移動であるため相手に読まれやすく、使いどころが難しい技術である。だがこの場面においては有効な一手であつた。

イグニッショーンブーストが難しい技術というのは何も相手に読まれやすいということだけではない。一瞬の加速によりかかる重力、そして目まぐるしく変わる視点、そしてその加速した機体を自身の望んだ位置で止めるブレーキ、等の様々な要因があるためである。

そしてこの場面。ブリュンヒルデと後退した相手との距離はわずか十数メートル。そのわずかな距離でイグニッショーンブーストをすればどうなるかは、考えるまでもない。制御できないままで通り過ぎるか、相手に直撃。直撃して相手を混乱させるという奇策もなくはないが世界最強の女がそんな無様な真似をするわけがない。ならば通り過ぎたかと言えばそうでもない。その通り過ぎる一瞬を見計らつてブレーキし相手の背後を突く。言葉で表すと簡単に聞こえるかもしけないが決してそのようなことはない。たとえ反射神経がいくら良くとも、それはあくまで人間の範囲内。時速にして数百から

千キロにも達する戦いの中で反射的に動けるものなどいない。

ならばどうやつて彼女はそれをやつてのけたのか。反射神経が超人並みであつたことか、はたまた時をかけた経験か、それとも直感的なセンスゆえか。いや、そのどれもが当てはまる存在であった。天才という言葉すらも霞むような存在、『鬼才』これが彼女にもつともあてはまる言葉であつた。

その勝負を観る誰もが息をのんだ試合はその刹那、けりがつくことになる。淡い光を放つたブレードで相手を斬り裂き、エネルギー残量を0にした。静まり返るファイールド。しかしそれもつかの間、大歎声が巻き起こる。多くは勝者への賛美。はたまたその試合への興奮の叫び声。勝者と敗者、その明暗が分かれたものの、互いの善戦に誰もが拍手し誰もが讃えた。その2者は互いに握手し抱き合い、ピットに戻る。選手が戻つたにもかかわらず、そのファイールドはいつまでも興奮冷めあがらない様子であつた。

そしてここにもう1人その興奮が冷めあがらないものが存在した。歳は10代前半から中頃あたり。黒髪黒目の東洋人の風貌である。髪は短髪、普段は目がきりつとしていて同年代では大人びた印象を与えるが、今は興奮のためか目が見開き、口は歓喜に歪められ、少し幼くも見える。彼の名は友澤 勇気（ともざわ ゆうき）。少し正義感が強めなごくごく一般的な少年である。

その少年が見ていた番組が数年前から話題のインフィニット・ストラトス、通称 I S の数年に一度の国際試合、モンド・グロッソの準決勝の生中継の模様であった。

I Sは今から8年ほど前、とある天災が発明した超高度なマルチフォームスーツである。その性能は今までの兵器をただの鉄くずに変えるほどの性能を秘めており、この I S 数機で小国が落とせるとまで言われている。

しかしそんな I Sにも弱点というものが存在する。それは女性しか搭乗できないということと、I Sを作動させるうえで絶対に必要なコアが467個と限られていることがある。

そんな背景があり、I Sに乗ることができる女性は社会的な権力を次第に持ち始め、女尊男卑という傾向まで出始めるまでもなった。

そんな女性の乗り物である I Sに多大な興味を傾ける少年、友澤勇気。何がそんなにも彼を駆り立てるのか。試合に出ていた最強の女が同じ日本人であることもある。彼の叔父が I Sの研究員であることもある。しかし最大の要因は彼が過去に経験した I Sに関する事件に対する羨望ともとれる憧れにある。

彼の父親は日本のわかりやすい正義の象徴である警察官である。そんな父親の背中を見ながら育つた彼はまっすぐ実直に育つた。幼少のころには悪を挫く戦隊ヒーローものに憧れ、自身もいすれば彼らのように戦うことを夢見ていた。しかしそんな中現れ

たのが『I S』という存在であった。現実にあつた“白騎士事件”は彼に一つのカルチャーショックを与えた。

白騎士事件：詳細は省くが、とある者のハッキングにより日本に数千発ものミサイルが向けられた。その時の彼はわずか5歳であった。実際に危険にさらされ避難もした。何が起こっているか解らないながらも周りの状況を察し恐怖を感じた。その時彼の中にはあつたのはきっと正義のヒーローが助けてくれるという淡い現実味のない希望であつた。

そこに現れたのが白騎士、I Sであった。その機体は全てのミサイルを打ち払い日本を救つて見せた。そして役割を終えたかのように白騎士は去っていく。それを避難所のテレビ中継で見ていた少年は当然のように憚れた。夢にまで見たヒーローが自身を救つてくれたという先入観が余計に憧れを強くした。その裏では各国の軍との戦闘があつたのだが純粋な幼少の彼にはそんなことは耳には入らなかつたのだった。

そして現在、8年の時が過ぎ、友澤勇氣も中学生になつた。そして知つたのは全てが綺麗な憧れではなくなつたことだろうか。少しづつ大人になつた少年は裏で何があつたか、I Sによりどのように世界が変わつたのかを知ることになる。正義のヒーローという幻想を抱いていた少年にはショックが大きかつた。数日引きこもつて親を心配させたこともあつた。

そして彼は一つの結論に達した。たしかに IS によつて世界が変革したのは事実であり覆しのできないモノであつた。各国の兵士が職に迫われたり、ISがらみのデモや反乱が起こつたことも。しかし、確かなメリットもあつた。各国の紛争は IS という軍事力が牽制しあい、少なくなつた。（アラスカ条約では軍事利用は禁止とあるがこれは建前で裏では争いがある）ISにより凶悪犯罪を防ぐなどもしばしばあつた。良いことと悪いことは表裏一体であることを少年は学んだ。そして IS そのものではなくそれを扱うものの行いによつていかにも変わるものではないかと。

世界を少し知つた少年は、新たな自身の価値観（正義）を持つようになる。ISは正しく使えばきっと世界の平和に役立つものだとある種の確信を抱くようになつた。ただ一つ残念に思うことは自身が IS に乗れないことにあつた。世界を知つても強さへの憧れは変わらず持つていたからだ。こここのところはほかの少年たちとも変わらず童心を持っていたのだった。

このすこし正義感の強い少年、友澤勇氣はこの数日後世界の常識を覆すことを引き起こすのだが、今はまだ誰もその事実は知らない。

1話　出会い

ISΩ

1話　出会い

第2回 IS モンドグロッソから数日が過ぎようとしていた。その結果はと、決勝まで進んだ最強の女、ブリュンヒルデ『織斑千冬』はどういうわけか棄権し、大会2連覇という偉業はついには果たすことができなかつた。その事情として2年後に世界を騒がす原因となる片割れが関係するのだがここでは割愛しておく。

その結果を知った友澤勇気はひどい落胆を覚えた。あそこまで圧倒的な強さを持つ彼女が何故決勝になつて棄権したのか。いくら調べてもあくまで一般人である彼には知ることができなかつた。

そしてその後の引退会見である。棄権した責任かどうかはわからないが引退し一時ドイツで教官職に就くという情報を叔父から教えてもらつた。確かに落胆はあつた。正直まだ現役でも行けるだろうと誰もが考えることを勇気も思つた。だが IS にかかわつている以上なにかあつての行動なのだろうと薄々ながら感じ取るのであつた。日曜日のある日。勇気はとある IS 研究所に訪れていた。勇気が IS に興味がある

ことを知っていた叔父は見学として勇気を誘つたのだつた。織斑千冬の引退で少なからずショックを受けていたのもその要因の一つであつた。それに勢いよく食いついた勇気は今までのネガティブさを打ち消すかのようにテンションが上がつたのであつた。当然機密に触れるようなものを一般人である勇気に見せるわけにもいかないので、簡単な概要の説明をしたり、武器転送の仕組みなどほかのISでも使われる技術の差しさわりのない程度の説明であつた。しかしそんなことにもかかわらず、勇気は高揚気味にかつ真剣に聞いていたのだった。そんな様子から勇気の叔父、友澤源内（ともざわげんない）は気分を良くしたのか、はたまた今では珍しく男でありながらISの構造に興味を持つ勇気に期待してか少しだけISを近くで見せることにした。（ISは女性の乗り物であり、それを整備する人も初めは男性が中心であつたが次第に女性が増えつづるのが現状である）

それがこの世界の1つの事件として後々騒がれることを源内も、その他にここで働いている研究員も、もちろんその当事者たる勇気もまだ知る由もなかつた。

「さて、こいつが今私が研究開発しているISだ。どうだい？なかなかかっこいいだろう！」

ふふん、と少し自慢げに語る源内。さながら子供が自身で作ったプラモデルを自慢するかのごとくである。その様子に少し苦笑しながらも勇気は受け答えする。研究者と

はいつまでも童心を忘れないからこそ様々な発想ができるのかかもしれない、と頭の片隅によぎるのであつた。

そして、そんなことを考えている勇気もあまり冷静であるとは言い難い状態であつた。憧れのISが今自分の目の前にいるという事実が勇気を興奮させた。

「こいつの名前はΩ（オメガ）。もうほとんどが完成に至つていて、恐らく、私の知る限りでは現世界最高のスペックを保有していると自負するよ！あらゆる場面で自身の最高の性能を引き出すことができるオールラウンド型のISさ！ただ……」

そのオメガの外観はとすると全体的に黄色と橙色であり、両腕には鋭利な爪。背中にはシールドを背負つている。体は鎧をまとつており防御能力も高そうである。頭は竜を思わせる外装がある。そんなオメガの性能を勢いよく説明する源内。そんな事をただの中学生に教えていいのかよ！という突つ込みが勇気の頭をよぎるが気にしない。しかし途中で説明が途切れる。

「ただ……なんなの叔父さん？」

不審に思つた勇気は疑問をそのままぶつける。一瞬の沈黙の後、源内は苦虫を噛んだかのような顔で歯切れ悪く説明を続ける。

「…………あー、その、なんだ。今まであらゆるテストをしてシミュレーションでは常に期待値を上回る結果だつた。そこには私も驚きながらも興奮を隠すことができなかつた

よ

語るように話し始める源内。まるで昔を懐かしむような少し諦めが見える風貌であつた。しかし、とまた言葉が途切れる。勇気はその雰囲気にじつと耳を傾けることしかできなかつた。

「一つの節目として、こいつに人を乗せてテストすることになつた。その時我々は大きな期待であふれていた。オメガは必ずISにおいて一つの革命を起こすとね。だが結果は無残なものでしかなかつたよ。こいつはどんな操縦者にも反応を示さなかつたのさ。今でも様々な実験を繰り返してはいるもののその原因は突き止められず、今ではこの通り置物と化しているよ」

源内は目をつむり沈黙した。勇気は改めてこのIS『オメガ』を見つめた。コードにつながれており今でも研究しているのがありありとしてわかる。しかしこの場を動かしていくないのか、まるで移動跡が見つからないのである。

勇気はもう少し前で見ようとオメガの直前まで前進した。そして見上げるとそこにあるのは頭部。光が失われた目は何故か悲しそうで、そして誰かを待つてゐるよう感じた。そして一瞬目が輝いたように見えた。目の錯覚とも思えた。しかし何故自分はこんなにもこのISに心を奪われているのだろうか。勇気はその目から視線を外すことができなくなつた。いけない事だとは頭では分かつてゐた。しかし体はそれに触れ

ることを止めることができなかつた。

源内が目を開けると、勇気がオメガに触れようとしているのが目にとれてわかつた。自身がどれだけ感慨にふけつていたのかを理解し、呆れたものの、さすがに子供に I S を触れさせるのも問題だらうと思い勇気を注意しようとした。

「おい勇気！ ちょっとまー」

そこまで言いかけて言葉が、いや思考が停止した。

——プログラム起動。適正者ノ存在ヲ確認。適正者ノ搭乗次第フィットティング及び、フォーマットヲ開始シマス——

そこに流れるのは機械音声。ただの機械音のはずなのに何故こうも歓喜を感じさせるのだろうか。冷静になりきれない頭をたたき起こして場をよく見る。そこには何が何だかわからぬ様子の甥の存在。顔を両手でたたき目を覚ます。今自分は何をしなければならないのか焦らず、すぐに道筋を頭に浮かべる。

「勇気!! 落ち着くのは無理かもしれないが、無理にでも落ち着かせろ!! 危険はまずないから気を高ぶらせずその場で待機！ 今からデータを取りながら、確実な安全を確保するために俺は少し外す！ 不安かもしれないが何とか耐えてくれ!!」

自身でも何を言つてゐるんだと、冷静な部分で思う。社会人になつてからは封印していいた昔の口調にもなつてしまつた。しかし源内の心はざわめきを落ち着かせることが

できぬいでいた。起動したのだ。自身の希望の象徴たるオメガが!!各部署に連絡を回し急いでデータを取らなければならない。オメガのためもある。しかしあつと大事な事がある。それは自身の甥の事であつた。これから甥は関わらなければならぬ。このISに。いやでも、どんな不幸が待つていようとも。この世界の常識を覆してしまつたのだから。

正直、勇気にとって自身の身に何が起こつたのかよくわからなかつた。IS、オメガに触れた直後、突然の機械音声。呆然としながら取り込まれていく自分。叔父の言葉も何か言つてゐるのかはわかるが、その言葉を理解するには至らなかつた。まるで他人事のように思えたそれは、やはり現実でしかなく我が身に起きたことであつた。

『ISを起動することができるのは女性のみ』そんな言葉が頭によぎる。しかし現状はどうだろうか。自分は女だったのかと何とも間抜けな問いを自身にするも、そんなわけあるはずもない。ちゃんとついてるし。――なにがとは言わないが。

頭には、自身の知りえない情報が流れ、ただ一人孤独と不安が広がるばかりであつた。ただこのような混乱の中、一つ確かに安心できるものがあつた。

温かかつた。

この温かみが自身を支えていたのかもしれない。まるで大丈夫、心配しないでと勇気を励ましているかのようであつた。

この日、源内にとつても、勇気にとっても、忘れる事のできない出来事が起こつたのだった。

2話 現状

ISO

2話 現状

勇気がIS、オメガを起動させて数日が経過した。現在勇気は叔父の研究所に居座っている。両親には叔父、源内から事情を事細かく説明され決して騒がず、決して情報を流出しないようにと伝えた。勇気の父は警察官のためか事の重大性を瞬時に理解し、自身の妻にそれを伝えた。聞いた当初はひどく困惑したもの、我が子を安心させるために電話でしつかりとした様子で言葉を交わした。

学校はもちろん欠席。ISを起動させた女性たちは、皆悪い影響は今のところ出ていないためおそらく問題はないだろうが、男が起動させたのはIS史上初の出来事であった。そのため何が起こるかわからない。厳重に検査することで勇気の両親、そして勇気自身の安心を与えるため、一般には検査入院という形で数日検査することになった。

そしてもう一つ大きな問題がある。それはこの事件をいつ公に発表するかということ。いつまでも隠し通すことは難しい、というよりも不可能に近い。勇気がISと関わ

らず一切の事を忘れて暮らすという案もあつた。だが勇気自身 IS への憧れか、強さへの渴望からか、決してこの力を手放したくはなかつた。ここまでならば子供の我儘でいきでもなかつたことにはできるだろう。問題は IS オメガの方にあつた。オメガは勇気から一切離れることがなかつたからである。まるでようやく見つけた相棒を手放さないようになつた。

研究所内の情報統制を取ればおそらく数年は可能という見込みではあるが、それでも数年。勇気が生きているうちに確実に情報は広まることになる。ならば今公表するかと言えば、それは悪手である。今勇気は中学2年生。当然学校にも通わなければならぬ。通わないにしても24時間体制で護衛を付けなければならず、その護衛は IS となる。IS に対応できるのは IS のみ。相手の仮想最大戦力が IS ならば対象を守るのも当然 IS となる。貴重な男性 IS 操縦者に対する対応ならばこれが当然の帰結であつた。だが護衛をつけるにも欠点が存在した。

その問題点として1つ、護衛ということだから当然強さが求められる。最低でも代表候補生並は。2つ目にその護衛が信頼できるかどうか。もしかしたら他国に金を賄賂されるかもしれない。または護衛はすべて女性であるため、男性である勇気に対してハニートラップを仕掛ける可能性もある。そして3つ目として、護衛対象である勇気の精神状態の保護。常に護衛を付けられているということはストレスにもつながるし、常に

狙われているということを意識することで精神的にやむ可能性を秘めていることだ。

まだまだ挙げれば多くの問題が浮上するだろうがここは割愛する。これらの点から含めて、今はまだ公表すべきではないという意見が日本の内閣の一部のトップ達と研究所内の源内たちの共通意見であった。そして公表に当たる上で大きな条件が2つ設定された。

1、最低でも勇気が自身を守るだけの力を持つこと。最低代表候補生レベルが望ましい

2、勇気が少なくともIS学園に入学できる15歳までは情報は死守すること

細かな条件はいくつもあるが、大まかに言えばこの2つであった。たとえ1の条件が満たせなくとも、2の条件であるIS学園に入学してしまえば、最低限の安全は保てる。これらの内容を勇気がオメガを起動させた当日のうちに大まかではあるが取り決めることに内閣と源内たちは成功した。そこからが彼らの地獄の数日となる。内閣は自國の益のため、源内たちはオメガの唯一の搭乗者である勇気のため奔走することになつた。

オメガを発動させた朝、勇気は頭からくる睡眠の指令を振り払いながら、重い瞼を開ける。昨日は自身がISを始めて起動させたことによる興奮によりなかなか眠りにつく。

くことができなかつた。恐らく、子供のころにヒーローショウに連れて行つてもらう前夜よりも、または修学旅行の前日よりも興奮ただろう。昨日の状況が夢ではないかと確かめるかのごとく自身の頬をつねり、周りを見回す。周囲が研究所の仮眠室であることから、昨日の出来事が夢ではない事を勇氣は確信した。

朝の身支度を終えた勇氣は前日のうちに取つて来てもらつた自身の服に着替えた。時刻は9時に差し掛かろうとしていた。現在は月曜日である。普段ならば地元の中学校に通い授業を受けている時間なのだが、自分はこうして研究所にいる。そんな自分の状況を顧みてまるで自分がずる休みはしたことはないが（勇氣自身はする休みはしたことはないが）感覚に少しこそばゆく思うのだつた。

仮眠室を出て、勇氣は源内の研究室に訪れる。昨夜寝る前に、今日起きたら来るよう伝えられたためである。廊下を曲がり奥にある室長室にたどり着く。今まで聞かされていなかつたが、叔父はこの研究所でかなりの地位にいるらしい。軽くノックをして待つこと数秒、中から返事が返つてくる。「失礼します」と一声かけ部屋に入る。そこには叔父源内が威厳ありそうな雰囲気で座つていた。これで目の下にクマがなければ、であるが…。そんな内心苦笑しながらも、自身のために奔走してくれたことによる感謝でいっぱいであつた。

「昨日はよく眠れたかい？…………いやお前の事だから昨夜は興奮で眠れなかつたのだ

ろう?」

少し意地悪な顔で源内は声をかける。さすがは自分の叔父であると勇気は思う。源内は自身の父の弟であり、正義感や責任感は父親似であるとよく親戚の集まりで言われるが、そのうちに秘める童心、悪く言えば子供っぽさは叔父に似ているとよく言われたものである。

「そういう叔父さんこそ、昨日はこいつの起動で眠れなかつたんじやないんですか?」

と苦笑気味に自身の首についたものを指しながら言い返す。もちろん、自身の事で走り回っていることは勇氣にもわかつていた。お互いを信用し合つてゐるからの軽口である。

「ははっ。これは一本取られてしまつたな。昨日は寝る間も惜しいものだからねえ。ついつい徹夜することになつてしまつたよ」

そう笑いながら少しの間談笑する。昨日の一時期の殺伐とした様子とは打つて変わつて、お互に朗らかである。昨日はいろいろな事がありすぎて互いに余裕がなかつたためであつた。

「それでどうだい、今の調子は? まあその様子だと大丈夫みたいだがね」

談笑を切り上げ、勇気の状態を尋ねる源内。勇気の首に存在する黄と青で螺旋された首輪。これは昨日オメガを起動し最低限の確認が終わつた後、待機状態に戻つたのがこ

の状態である。その首輪はどうしても外れず、後に学校で話のネタにされるのだが今は知らないほうがいい事実である。

「すこぶる良好ですよ。まあ体が眠い事以外はですけどね」

互いに笑いながら状況を確認する。源内は勇気の状態を。勇気は今現在の自身の立ち位置について。勇気はISの興味から一般人よりはその話題に精通していたため、自分がどのような状況か冷静に判断することができた。もちろん不安がないといえば嘘になる。しかし、幼いころからよくしてくれた叔父が味方であり、研究員の人たちも出会つたばかりではあるが善い人ばかりであつた。そして両親からの電話、それらが勇気の精神を支えていたのだつた。

「どういうことが、政府と我々研究員の見解なのだが、いや決定か。できる限りお前の人権を守つた上での取り決めだ。今後多少の転換はあるだろうが大体この通りに動くことになるだろう。ここまでで何か質問はあるかい？」

真剣みを帯びた表情で源内は尋ねる。勇気も自身の事なのでしつかりとした表情で返事をする。

「じゃあ、俺は今後ISの訓練のためにここに何度も来ることになるわけですね。うーんと、あ、この実践訓練つて実際に人と戦闘するつてことですよね？俺が男だつてばれちゃいません？」

勇気の質問は的を得ていた。ISを操縦するうえで重要なのは基礎知識、基礎訓練、そして経験である。いくら基礎ができても経験がなければ机上の空論で戦うも同意である。その経験を得られないのであれば1の条件は確実に満たせないのである。

「うん。勇気の疑問はもつともだ。——だが！こんなこともあろうかとボイス変換機を作つておいたのだ！これに合わせてオメガをフルフェイス状態で使うことで性別もばれない使用だ！お前の体格ならばまだ女性と偽ることも可能だしね！これならばIS学園に入る1年半後までは問題なくこまかせるはずさ！」

もし後ろの背景を漫画で表すならば、ババーンという言葉がデカデカと主張しているに違いないと、少し遠い目をしながら勇気は思う。さつきまでの眞面目な雰囲気はどこへ行つたのやら。そして少し間を置きさつきの言葉を反芻する。

「——ちよつと待つてください。先ほど聞き捨てならない言葉が聞こえたんですが。女性と偽ることができる？えーと、なんですか？それは俺が小さいってことですか！？これでも平均は：いや少し誇張しましたけど！それでも俺は小さくはない！」

突つ込むところはそこで果たしていいのだろうか、と人がいたならば言うだろう。思春期の男子中学生にとつて小さいなどということは禁句にも等しい。少しでも自分を大きく見せたいお年頃なのである。同年代よりは大人っぽい雰囲気のある勇気であるが、所詮は中学生。まだまだお子様なのである。ちなみに男子中学生2年の平均身長は

約160cm。勇気の現在の身長は155cm。平均から見るとやはり少し小さい。

「はつはつは!! 身長なんて気にしているとはまだまだ子供だねえ、勇気も! 大丈夫さ、まだ伸び盛りだから心配しなくとも勝手に伸びるって」

そういうながら勇気の様子に爆笑する源内。そういう源内はと180cmは越えた長身である。そんな源内にぐうの音も出ない勇気。

「ぐぐ……！ 自分が身長あるからって余裕かましやがつて……見てろよ、絶対に叔父さんよりでかくなつてやるんだからな!!」

そう言つて勢いよく室長室を出る勇気。その背中は負け犬根性丸出しながら、言わないのが大人の優しさだろうと源内は唸りながらしみじみ思うのであつた。

「——これから大変だらうが、頑張れよ、勇気」

先ほどからの言葉は不安があろう勇気に対しての親心ならぬ叔父心である。実際楽しんでいた部分もあるが昔から可愛がついていた甥を思つての心配りであつた。

ここで終わればよかつたのだが、そこは問屋が降ろさなかつた。

「——あ、まだあいつに伝えてない情報があつた。ちょーっと待て、ゆうき——！」

まだいつてないことがあああああー!!」

そうして源内も勇気を追いかけるべく室長室をでる。普段の二人を知る人物たちならば少し呆然としてしまう状況なのだが、昨日の興奮からか少しテンションが高い二人

である。何とも締まらない終わりである。

3話 結果と今後

ISQ

3話 結果と今後

とある研究室の一角。勇気は緊張した面持ちで椅子に座っていた。衣服は病院患者が着ているような白衣をまとつており、はたから見れば病人の少年が医師の診断を待つてゐる状態にも見えよう。もつともこの数日の検査の結果から、彼は何一つ悩むべくもない健康体であると証明されており、ウイルスなどの病気の心配をしているわけではなかつた。

勇気がこの数日行つてきたことと言えば、まず先にも述べた健康診断。その結果とそれ検査より過去のあらゆる勇気の身体データを比較することでのどうな差異があるのか。また、実際オメガを起動させ、心拍数、臓器、脳、精神など異常をきたしてはいいか。等々、書き記すだけでそれこそ分厚い本が1冊できるのではないかというものであつた。

そしてそれらすべての行程が終了し、結果を待っているのが今の勇気の状態なのであつた。

心臓の音がいつも以上に動きわめいていることを勇気は実感する。この緊張はなにも自身の体の心配だけではなかつた。もし結果がダメでオメガが取り上げられてしまつたらと考えると身震いが止まらなかつた。ほとんど諦めていた憧れのISをまさか起動させるとは勇気自身、思つてもみなかつた。もしその憧れがまた自分の手から離れるならば、きっと起動させたことを後悔するだろう。これならば知らないほうがよかつたと。

もつともこの勇気の心配はまるで意味のないものである。何故ならばオメガ自身が勇気を離さないからだ。極度の緊張からか、知つてゐるはずの情報も抜け落ちているほど不安であつたのだ。

勇気がこの部屋で待つこと數十分、ドアが開き、源内が鞄一つを片手に持ちながら入ってきた。

「よう、待たせたな。…………おいおい、そんな緊張するなつて。お前まるで死の宣告を受ける前の囚人のようだぞ」

源内はやれやれといった具合で、勇気とは真逆な具合で話す。しかし勇気にとってはこの結果が今何よりも重要な事であつた。そんなのほほんとしていられるか！と自身

の叔父を無言で半睨みする。

「あー、はいはい。私が悪かった。そう怒るな。一先ず、検査お疲れ様。本来ならここで前置きなりなんなり入れるんだが、…まあいい。それじゃあ結果を言うぞ。

問題なしだ」

「…………は？」

そんなにあつさりと言われると思つていなかつた勇氣は、呆然としたようにそう声を出すしかできなかつた。

「だから、問題なしだ。あらゆるデータから見ても問題は見当たらなかつた。世界最高峰の技術と人員を使っての検査だ。これでも不安ならば、私ではもう何もできないぞ」少し呆れたように話す源内。よほど衝撃的だつたのかと静かに勇氣の様子を見守る。しかし、いつまで勇氣から反応はない。いよいよ心配になつてきた源内は勇氣に近づく。

するとぶつぶつと声が聞き取れた

「…………よ」

何か言葉が聞こえ耳を近づける源内。

「ん? なんだつて? よ…?」

「…………いよっしゃああああああああああああ!!!!」

耳元で呼ばれた源内はたまらず勇気から距離を取り、耳をふさぐ。勇気の声は研究所に鳴り響き、疲れで眠つていた職員をもたき起こすほどのものであつた。それを直撃した源内のダメージは推し測るべくも無くである。

「ひやつほーう!! まじで!! 夢じやないんだよな叔父さん!! しゃあー!! まじテンションあがつてきたああー!!」

先ほどの面持ちが嘘であるかのような変貌であつた。あたりを動き回り、歎声を上げる勇気。前の葬式状態はいつたいなんだつたのか。もしかしたらその反動がここにきて一気に爆発したのかもしれない。

だがそれもすぐに鎮静化される。肩を叩かれ笑顔で振りむく勇気。そこにいたのは……鬼のような顔をした叔父源内であつた。

そして、ゴン!!と響きのいい音が部屋中になるのであつた。

「いってー、なにもまじで殴らなくていいじゃんかー。あー、こぶできるよ」

「やかましい!! あー、まだ耳鳴りが…。喜ぶのは構わないが、こちらに被害を出さないでもらいたいものだ、まったく」

「あー、うん、その件はごめんなさい。いやー、あまりの嬉しさに我を忘れてしまいました」

にへへ、と笑う勇気にこれ以上怒つても無駄だと悟った源内は、深いため息を1ついた。さて、と一息つき、源内は本題に戻ることにした。

「それでは今後の予定を説明する。おつとその前にこいつを渡しておこう」

そう言つて源内は持つてきた鞄から書類の入つたファイルと1枚のカードを手渡した。

「そのカードはこの研究所でのお前の証明書のようなものだ。こいつ1枚でこの施設内の売店、自販機等も無料で利用できる。周りにばれないよう、カモフラージュされるが絶対に無くすなよ」

「うん、わかつた」

「それでそつちのファイルだが、ISを扱ううえで知つておかなければならぬ最低限の知識やお前の今後のスケジュール表などが入つている。基本持ち出さず、家で読むよう。理由は言わなくてもわかるな?」

そんな源内の視線に、勇気はコクリと頷く。そんな勇気の様子に源内も頷く。これらの資料は国家の機密情報である。もつとも勇気の持つ書類にはたいしたことは書かれてはいない。精々、一般に出回っているIS情報より詳しい程度。だがそれを勇気が保有していると知られることは、あまりよろしくない状況だからである。

「では今後の事だが、お前はISを操縦するうえで、知識そして技術を学ばねばならぬ

い。そのスケジュール表に座学やら操縦と書かれているだろう。基本それにのつとり訓練が開始される。プライベートの時間は今までより減つてしまふことになるだろうが、悪いが我慢してくれ」

そんな少し申し訳なさそうな顔の源内。だが勇気の態度はまるで落ち込みがなかつた。むしろ歓喜に満ちた表情である。

(ついにISの訓練か！やべつ、また興奮してきた。)

オラわつくわくしてきたぞ！といった某野菜人のような具合である。

ちなみに一般学生ならば座学と聞けば嫌な顔をするだろう。むしろ勇氣にとつてはどんと来いといった具合だつた。何せ彼はISオタクなのだから。好きなことはとことん知りたがる勇気の性質上、ISの知識が多くなる事はむしろ好ましい事だつた。

また、勇気自身勉強はこれと言つて好きというわけではない。ただ、父親が文武両道を教育方針にしており、点数が低ければ小遣いが減らされるため、勉強はきちんとできる方である。また空手の道場にも通つていることから身体能力も悪くはない。

「——それではお前にISの操縦を教える教師役を紹介する」

そう言つて源内は携帯を取り出し、電話する。二言三言話し電話は途切れる。そして待つ事数分、ドアがノックされ、失礼しますという一声と共に一人の女性が現われた。そして源内の横に立ち、勇気に対しにこりと微笑む。それに対しても勇気は少し顔を赤ら

めた。

「紹介しよう。彼女がお前の指導役となる水奈月 楓（みなつき かえ）だ。彼女はお前が今後通うであろう I.S 学園の第一期卒業生にして、整備科主席。卒業後はうちの研究所の優秀な研究員として働いてもらっている。ちなみに、オメガの開発にもかかわっているから何でも聞くといい」

「ふふつ。室長、褒めても何もでませんよ。——ご紹介にあずかりました、水奈月楓です。これから貴方の I.S 操縦の指導役をさせていただきます。よろしくね、友澤勇気君」

「う…あ、えっと、宜しくお願ひします。水奈月さん」

「うーん、これからも顔合わせすることだし、もつとフレンドリイにいきましょ。わたしを呼ぶときは楓で構わないわ。その代り、私は勇気君って呼ばせてもらうから。良いでしょ？」

そう言つて微笑む楓。そんな様子の楓に対し、勇気はさらに顔を赤くする。それも無理ないことかもしれない。水奈月楓は所謂美女であつた。スラリとした均整のとれた体にセミロングの少し茶色がかつた髪。目はパツチリしており、美人ともかわいいとも取れる顔立ちであつた。

同年代の女子と話すことにはあまり抵抗がなかつた勇気であつたが、相手が年上のそ

れも美人となれば話は変わる。

「あう、え？ あ、はい」

と曖昧な返事をする始末であった。そんな勇気の様子を面白いものを見たと思う人物がいた。もちろん源内である。にやにやした悪い顔をしている。

「よかつたな、勇気。お前好みの年上のお姉さんに指導してもらえて」

爆笑をこらえるかのよう、傍から見れば非常にうざい顔である。まるで先ほどの恨みを晴らすかのようである。そんな源内の言葉に勇気は、ビクツと体を反応させ、身を乗り出そうとするも初対面である楓がいるため踏みどどまる。ものすごい形相で源内を睨みつけるも、源内は何食わぬ顔で口笛を吹く有り様だ。

そんな二人の様子にくすくす笑う楓。勇気と源内の視線が楓に集中する。

「ふふつ。ごめんなさい。室長と勇気君のやり取りがあまりに面白いものだからつい。仲がいいのね」

「こいつが赤ん坊の時から面倒見て來たからな。好みや癖なんかわかるものさ。何よりもこいつをいじるのが面白い。予想通りの反応だからな、くくく」

「だめですよ、室長。あまり勇気君をいじめちゃ」

そう言つて大人二人の会話が続く。話題の中心（おもちゃ）にされている勇気はとうと、面白くないといった顔で拗ねている。そんな様子に気づいた二人は笑いながら

謝った。

「遅れましたが改めまして自己紹介させていただきます。友澤勇氣です。そこの馬鹿叔父の甥です。えっと、みな：楓さん。これからご指導ご鞭撻のほど宜しくお願ひします。」

「ええ。よろしくね勇氣君。ビシバシ鍛えてあげるから、一緒にがんばりましょう」

「はい！」

そして楓から差し出される手。勇氣は少し躊躇するも、楓の悲しそうな顔を見て慌て握手する。すると楓の顔はすぐににこやかになるのであつた。狙つてやつたのならば、なかなかの策士である。

そののち世間話もほどほどにして楓は部屋を後にした。そして勇氣もようやく家に帰ることになった。数日ぶりの我が家であるが、すこし懐かしさも覚える。なにせあまりにも物事が大きかつたのだから。

移動の準備も整い、用意された車に乗り込み研究所を後にする勇氣。車に揺られ1時間弱、勇気は自身の家にたどり着く。運転手にお礼を言い、玄関を開ける。すると突然衝撃が走る。涙ながら勇氣を抱きしめる母であつた。その後ろには安心した表情の父。

ようやく帰ってきたと感じた勇気は一言、

「ただいま」

と言いISのことをしばし忘れ、家族団欒を楽しむのであつた。

4話 訓練

ISO

4話 訓練

勇気は久々の自宅だからなのか、それとも今までの出来事のせいか、自室に戻るとすぐ眠りについた。

そして翌日。久々の学校である。一応検査入院という口実があつたため、友人たちには心配されたものの、感謝しつつものらりくらりと話を合わせる。さすがに先日の出来事を語ることはできない。勇気の首にある待機状態のオメガを見た友人たちは、"これは何なのか"と尋ねるも、"検査のためにちょっとね"と言つて誤魔化すしかなかつた。

勉強については特に問題なかつた。研究所で研究員の人たちに教えてもらうことができたからである。悪いと思つた勇気ではあるが、彼らは頭の休憩にもなるしちょうどいい、といいながら笑ってくれた。

学校も滞りなく終わり、勇気は自身が通う空手道場に足を動かした。歩くこと十数分、道場に着いた勇気はいつも通り大声で挨拶しながら入る。そこで待つていたのは、

胴着を身に纏つた老齢の男性である。歳で仕事を退職し、町の子供たちに空手を教える厳しくも優しい人である。勇気自身、幼いころから通つており、尊敬する人の一人である。

「お久しぶりというほどではないですが、こちらの都合で休ませてすみません、先生」「ふむ。検査入院とお前の父親から聞いていたが、大事ないようで安心した」

優しそうな顔を浮かべる先生。そんな様子に勇気自身も笑みを浮かべるも、真剣な表情になり、話を続ける。

「先生。これからは事ですが、度々空手を休ませてもらうことになります。本当に勝手なことだと思いますがお願ひします」

「——それは今回の検査と何か、いやいい。それはどうしてもお前に必要な事なのだな?」

「はい、どうしてもやらなければならない事です。俺自身のためにも」

一瞬の沈黙。勇気をじっと見つめる先生。勇気も視線をそらさず、ぐつと知らないうちに目に力を入れ、先生の目を見る。

「……わかつた。ならばそのことに全力を尽くすことだ。儂からはもう何も言わんよ」

あまりにも簡単な一言であった。だがそこから何かを感じ取ったのか勇気は深々と

一礼した。

日は変わり学校が連休の土日。勇気にとって初の訓練日である。用意されたISスーツを着用しわくわく感を抑えられないのか、ダッショウで訓練場へ向かう。

勇気が着いたのはドーム状に覆われた広いグラウンド。研究所で開発されたISの試験運用のための敷地である。広さはIS学園のドームほどではないものの、しっかりと飛行できるだけのスペースは存在した。そして、そこにはすでに楓が待っていた。

「お待たせして申し訳ありません」

「ふふ、いいのよ。私の方が早く来すぎてしまったみたいだから」

そんなデートの挨拶のような会話を交わす。もつともお互い付き合っているわけでも、意識したものでもないのだが。

「それじゃあ、さつそく始めましょうか。ではISを展開してみましよう。展開の仕方はわかるでしょう？」

「はい。検査では数度かやらされましたから」

そう苦笑しながら勇気はオメガを展開する。その間、2秒と少し。熟練したIS操縦者ならば1秒とかからず展開するのだが、まともな展開は数えるほどでしかない勇気にはそれを求めるのは酷であろう。楓もそのことをわかっているのか、勇気にアドバイスす

る。

「そうね、ISはその操縦者のイメージによるところが大きいの。展開にこれだけ時間がかかっているということはまだ勇気君がオメガのイメージを完全につかみ切れていないことにあるわ。暇な時でいいから、オメガを纏つた自分のイメージを明確にすること。それが一番の近道ね」

勇気自身休みの間、イメージトレーニングはしていた。もつとも、空を自由に飛んで敵を倒すといった妄想に近いものではあるが。

ある程度自信をもつていた勇気だが遅いといわれ、少々ショックを受ける。そんな様子を見かねた楓は勇気に喝を入れる。

「はい！そんなことで落ち込まない！勇気君はまだまだ経験が少ないんだからできなくて当たり前。時間がかかるても展開できるだけましよ。中にはそこで躊躇して展開できなかつた子もいるんだから、大丈夫、自信を持ちなさい」

少し厳しくもするも、事例を出し勇気に自信を持たせる。他人と比べても仕方のないことだが、ISは精神状態も影響する。飴と鞭のうまい具合の使い分けである。

ある程度状態が整つたところで、楓は勇気に訓練内容を伝える。

「それでは、記念すべき第一回の訓練と行きましょうか」

喉を鳴らす音がする。当然勇気である。どんな訓練なのか内心わくわくしながら楓

の言葉を待つ。

「第一の訓練。それは歩行訓練よ」

「歩行、訓練ですか？」

少し予想外の内容に少し戸惑う勇気。

「そう、ただ I S を纏つて歩く。ただそれだけの訓練よ。でも想像以上に難しいと思うわよ、これ」

そう言つて笑う楓。そんな馬鹿な、と勇気は思いつつも一步踏み出す。何だ簡単じやないか、と思いながらもう一步進む。

「——え、うわ！」

バランスを崩し倒れそうになる勇気。だが何とか踏みとどまることに成功する。

「どう？意外と難しいものでしよう。何故か解る？」

何故歩くだけが困難なのか。自身の状況を改めて確認する勇気。いつも以上に高い視点。体を纏う鎧。数瞬考えて勇気ははつとする。

「いつもと違う体躯に、脳が慣れていないためついていかず、バランスが取れなくなる。つといった感じですか？」

「ええ、その通り。ふふ、なかなか優秀ね、勇気君。教える手間が省けて、お姉さん、嬉しいわ」

頭を搔き少し照れる勇気。だがいつまでも照れているわけにもいかず、歩行を続ける。ゆっくりとバランスを取りながらグラウンドを歩いていく。イメージとしてはバランスが取れた竹馬に乗っている感覺が近いだろうか。次第に速度を上げ、違和感がなくなるのを勇気は感じる。そして数分、問題なく歩けるように成長した。

「うん。歩行は問題なしね。それじゃあ、今度は走つてみましょーか」

またもや地味な訓練である。しかしこれらがいかに重要なのか勇気は理解していた。ISは基本どんな状況でも対応できる兵器である。そして多くは空での活動であろう。そんな人間の活動から離れた空での操縦。人間の活動内である地上での操縦ができるなくては空での操縦などもつてのほかである。

走る動作は歩行よりも当然スピードがある。そのため、いくらか覚束ない様子であり、途中で転ぶこともあつたが、いつの間にか普段のように走れるようになつていた。「よしつ、地上での基本動作はとりあえずオーケーかな。次は取り敢えず体を動かしましょう。勇気君は空手をやつているわよね？その動作でいいからやってみて」

言われた通り、勇気は空手の基本である突きや蹴りといつた動作から型まで様々な動きをする。歩行の時とは比べ物にならないほど様になつた動きである。勇気自身慣れてくれたこともあるがはたしてそれだけなのだろうか。

そこから指導は続き、楓は勇気の動作から反応の鈍い箇所や変な癖がつかないよう指

摘していった。

「次はオメガの武装について説明していきましようか。両腕についている爪、ドラゴンキラー。特殊合金を使用しているため攻守両面において高い性能を発揮するわ。そして背中のブレイブシールド。今は両別れして羽みたいな形をしているけど、取り外して合わせれば盾として機能するわ。限度はあるけれど実弾からエネルギー弾まであらゆるものから防御できる。基本武装についてはこのくらいかしらね」

それを聞いた勇気は自身の武装を確認する。あらゆるもの引き裂いてしまいそうなクロ一、ドラゴンキラー。これならば、自身の空手の突きも問題なく打てるし、威力も増すことだろう。斬り裂くことも可能だがこれは用練習といったところだろう。次にブレイブシールド。実際に取出し防御の構えを取る。この大きさならば防御には申し分なく、うまく使えば武器にもできるだろう。

武装を確認し終え、勇気は改めて、いける！と確信する。これならば自身の得意な格闘戦を生かすことができる。さらには遠距離型と当たつてもシールドを用いれば近づくことも可能であると。

それらの確認動作をすることで初日の訓練は終了した。

「はい！じゃあ今日はここまで、しつかり内容を復習して明日の訓練に備えるように」「ありがとうございましたー！」

訓練を終え、ピットに戻る勇気。そこで待っていたのは源内であつた。

「お疲れ。初めてのIS訓練はどうだつたかな？」

「最初の事で戸惑いもあつたけど、まあ何とかつて感じかな。こいつも想像以上に俺にあつていいみたい」

「そうか。だがまだオメガ自身には隠された能力が存在する。まあ、それがなんなのかはお前自身が確認することだ。お前がオメガを信じればきっとそれに応えてくれるだろう。こちらはそれを、気長に期待しながら待つとしよう」

そう意味深な言葉を言いながら勇気ースポーツ飲料を渡して去つて行つた。

「オメガの隠された能力……か」

そうつぶやき勇気自身もオメガの点検のため整備室へと足を運ぶのだった。

5話 初戦

ISΩ

5話 初戦

勇気がISの訓練を開始して一月が過ぎようとしていた。学校も夏休みに入り、密度の濃い訓練が可能であつた。そのため勇気は源内に頼み込みスケジュールをもつと増やしてほしいと嘆願した。まだISを起動したばかりであり、勇気自身のプライベートな時間を気にしていた源内だが、勇気の真剣な願いからか仕方ないと許可するのであつた。なんだかんだ言つて甥に甘い源内であつた。

勇気にとってISの訓練は目新しいものであり、そのどれもが勇気の心を躍らせるものであつた。特に勇気が感動を覚えた事柄はISの花形、飛行であつた。

人類にとって飛ぶと言う事はどういうことなのだろうか。恐らくは人類の憧れの一つとも取れよう。ライト兄弟が飛行機を発明して1世紀と数十年。人間にとつて飛ぶと言う事はそれ以前よりは身近なものになつていつた。ハングライダーやホバークラ

フトなど個人としての飛行を可能にしてもいる。だが、それはある一定の方向への飛行であつたり、その場での停止などはできないものであつた。だがそれらを覆したのがISであつた。その場での停滞はもちろん、方向転換も自由自在であつた。ISが今までの兵器を圧倒するのもそれが理由の一つであつた。

そんな人類の憧れである飛行であるが、勇気とてその例外ではなかつた。初めての浮遊感。初めての視点。何もかもが新鮮であつた。そして少しの優越感に浸つた。今まで女性しか乗れなかつたISではあるが、その例外が勇気である。今までISの操縦者達はこんなにもの風景を見てきたのだと、少し嫉妬した。だが、今はドームであるが自身もこれからこの空を自由に飛べると考えると激しい高揚を感じるのであつた。

勇気にとってISによる飛行は地上での訓練以上に困難であつた。まずは重心の取り方。地面がつかない状況でどのように蹴り出し、足に力を込めるのか初めのうちはまるで空回りであつた。楓からは難しく考える必要はなく、イメージを持つことが大事だと教わる。何かを蹴るイメージ。何もないところで一体何を蹴ればいいのかという疑問に勇気は頭を悩ませたが、最終的には空気は固定されているものであるというイメージで問題をクリアする。

次に間合い、空間把握といった空を利用した3次元戦闘の基本である。これについてはいまだ把握しているとは言い難い。ISは攻撃、防御、機動とすべてに優れているが、

こと機動においては、前兵器群を圧倒的に上回っている。その高速の機動力を、勇気自身生かし切れていないのである。今はなんとか持ち前のセンスで補つてているというのが現状だ。

これらの問題を抱えつつも、勇気は I.S の素人から初心者に成長した。まだまだ、現状能力は低いものの、予想を上回る成長率であつた。そこで経験という意味で I.S 同士の戦闘が予定に組まれるのであつた。

学生の夏休みも中盤にあたる 8 月上旬。勇気はとある I.S 戰技場のドームに訪れていた。これから自身の初の戦闘が行われようとしている。

車から降り、静かにピットまでたどり着く。ここまで誰にも会わなかつたのは勇気が男であることが理由であることを容易に想像ができた。オメガを起動させ、源内が試合前の簡易チェックを行う。そこにいるのは勇気、源内、そして楓と複数の研究員の人達であつた。これから戦合は歴史上初の男性 I.S 操縦者の戦闘である。もつとも、公の場にはまだ知られていないが。そのため、データ収集のため人数が集められることになつたのだ。

「よし。問題なしつと。オメガは万全の状態だ。後は勇気、お前次第だ」

「勇気君、気負う必要はないわ。肩の力を抜いて、悔いのないよう力を出し切りなさい」

二人の激励に勇気は頷きで答える。手が震える。これは恐怖からくるものではない。武者震いである。初の戦闘という不安と精神の高揚が勇気には心地よかつた。

勇気の対戦相手は、代表でも候補生でもなかつた。その候補生の前。所謂テスト生と呼ばれる存在だ。彼らは I.S 学園を入学するおよそ 3 年前から I.S に乗り出し、次代の候補生、または代表として育てられる、I.S 適性の高いエリートである。当然、勇気よりも一年程の経験があるため苦戦は必至である。それでも勇気は負けるつもりなど、さらさらなかつた。初めから負けるつもりで戦うなど、勇気のプライドが許さなかつた。

相手の名前は、更識 簪。自身と同い年で搭乗機体は打鉄。打鉄は純国産の第 2 世代型の I.S。勇気のオメガよりスペックは劣るもの、安定した良い機体である。だが勇気と簪との経験の差から劣勢は確実だ。

勇気は変声期とフルフェイスであることを確認し、最後に機体情報を見る。シールドエネルギーから武装まで網膜投影ですべて視認し終え、オーレーの合図を出す。ゲートが開かれ、部屋に光が満ちる。幕が開けたこと理解した勇気はブースターを蒸かす。

『オメガ、出ます!!』

心臓の音が今はひどく静かである。全てを対戦相手に集中させオメガは飛び立つ。

ひどい日差しが勇気の目に飛び込む。夏の日差しを浴びながらドームの中央まで飛ぶ。そこで待っていたのは打鉄を纏つた人物。水色の髪に眼鏡をかけた少女。更識簪であつた。こちらの顔を見て少し顔を見て目を少し顰めるも、こちらの事情を知つていいのかそこには何も言わなかつた。

簪が対戦相手である勇気について受け取つた情報はわずかでしかない。相手はあるオメガを起動させた女性であると言う事。まだ起動させてまもなく、IS経験も少ない事。そしてどんな事情があるかは知らないがその女性の情報は機密であつたこと。その三点だけであつた。

それでも簪がすることは変わらなかつた。相手を打ち倒すこと、ただそれだけ。あの姉に追いつくためにこんなところでは負けていられないのだから。

「……………えーと、よろしく、更識簪さん」

沈黙を破つたのは勇気の方であつた。あまりの静かさにしひれを切らしたのか、それ

ともこの空気に居た堪れなくなつたなのか。その両方である。

「…………よろしく」

(あ、よかつた。返事帰つてきた。帰つてこなかつたらどうしようかと思つたけど……)
『ごめんね。お r : 私は事情で情報が明かせないんだ。だから、私を呼ぶときはこの機
体と同じオメガでいいから』

「――そう」

会話が途切れる。

(は、話が持たない！俺にどうすればいいんだよ、この状況！)

そんな勇気の内心を知つてか知らずか、ドームに放送が流れる。助かつたと顔が隠さ
れた中でほつと溜息をつく。そして気持ちを切り替える。

〔これより、更識簪、オメガ搭乗者、両名による模擬試合を開始します。両名は指定位置
についてください〕

勇気、簪の両名は指定位置に着く。そして互い見つめあい、試合合図が鳴るのを待つ。

〈開始五秒前〉

研究員たちは忙しなくコンピューターを動かす

源内と楓がモニター画面を見る

〈四〉

〈三〉

簪はじつとオメガを見つめる

〈二〉

勇気が両手足に力を込める

〈一〉

開始のブザーが鳴る

試合開始!!

先に仕掛けたのは勇気の方であつた。長期戦になれば経験の少ない自身が不利であることを勇気は理解していた。スタートダッシュを決めて簪の前に飛び出す。そして右手のドラゴンキラーで突きを繰り出す。だが予想していたのか簪の薙刀によつて阻止されてしまう。

『ちい!!』

防がれた勇気は、一步下がり、もう片方である左のドラゴンキラーで簪を斬り裂く。
 しかしこれも簪に避けられてしまう。

(想像以上に手ごわい！奇襲は失敗してしまったか！)

そして数合の薙刀とクロールの斬り合いが続く。本来はリーチの長い薙刀のほうが有

利であるが、勇気が接近戦を得意としていることと機体の性能差、そして簪の得意距離でないことも合わせて互角の戦いが広がっていた。そう互角である。

「…………」

簪はリーチの差を利用し少しオメガとの距離を開け、右、左と揺さ振りをかけながら攻撃していく。

勇気もそれを回避しながら今後の戦略を頭で練る。距離では勝てないとわかつているため、簪の懷に飛び込み一撃を入れようとする。だがそれがいけなかつた。飛び込んでいつた先で待つていたのは、薙刀であつた。

簪は上手く勇気が飛び込む隙を作り、誘い出す。そして薙刀を短く持ち替え勇気に突き出した。

勇気は右手を防御に回し何とか直撃を免れる。だがその衝撃でドラゴンキラーは吹き飛ばされ、地面に落ちてしまった。

『くっそ!!』

己の失態に悪態をつく。だがドラゴンキラーはもう片方あり、もう片方は威力が半減したものの己の拳がある。まだシールドエネルギーが大幅に減ったわけでも、負けたわけでもない。勇気は気合を入れ、自分を立て直す。そしてもう一度簪に接近戦を挑む。

楓。

「まずいな、あれは」

「ええ、勇氣君の得意な接近戦でさえ互角。さらに今は片手のドラゴンキラーを封じられ攻撃力は半減」

そして、といつて楓はＰＣからデータを呼び出す。そこに映し出されていたのは更識簪のデータであった。

「更識簪。勇氣とは同じ年の14歳。そして姉にはあの更識楯無。さらには……」「あの裏の更識の娘……か。どうりでいいセンスしている」

楓の言葉を源内が途中で紡ぐ。暗部の更識。ごく一部においては有名な日本の裏である。源内も過去に先代の楯無と会つており、そこでひと悶着あつたのだがその話はまた別の機会にしておこう。

「しかもこの子、遠距離が得意分野。今はまだやり合えているけれど、距離を取られればどうなるか。想像するだけで結果は見えているわ」

「ああ、――勝つのなら今しかないぞ勇気……」

場面はフィールドに戻り、そこでは激しいぶつかり合いが続いていた。フェイスアーキ

マー越しではわからない勇気の顔であるが、その顔は激しくゆがんでいた。それに対し
て簪は少々呼吸を乱しつつあるも、まだまだ余裕の表情であった。

それにはいくつか理由があった。まず勇気自身の経験が不足していること。そして
ペース配分。短期決戦で仕留めるつもりであつた勇気であるが、いまだに攻めきれずに
いてスタミナを消費している。最後の1つとして空での戦いであること、それが勇気を
苦しめていた。地上と空中では移動できる空間が違い、間合いもまた別である。その距
離を掴み切れず勇気の行動はそのほとんどが簪に読まれていた。

時間が経つにつれ勇気の精神状態は下降していった。もう決めなくてはという焦り、
そしてスタミナの減少。肉体的にも精神的にも勇気は追い詰められつつあつた。

「――――――

薙刀でドラゴンキラーを弾きながら簪は思う。

(…………接近戦は今は互角といったところ。でもこのままいけば勝つのは私……けど)

簪が考へてゐる通りこのままいけば勝利は簪に傾くだろう。だが戦いに何があるか
わからない。窮鼠猫を噛むという言葉もあるくらいである。

そして一つの決断を簪は下した。

「はああああ!!」

勇気に対し思いつきりの力で薙刀を叩きつける。勇気も急な変化に戸惑うも何とか

両腕でガードする。そして反撃に出ようとして身に飛び込んできたもの。それは対戦相手である簪の武装、薙刀そして銃撃であつた。

何があつたか一瞬わからなかつた勇気であつたが簪を捉えることで状況を把握した（まづい…………！）

あの一瞬の隙に簪は瞬時^{イグニッショングースト}で勇気から距離を取り、遠距離戦に切り替えたのである。薙刀を捨てるというリスクもあつたが、自身の得意な遠距離戦を持ち込むためにえて行つた。

そこからは簪が試合の主導権を握つた。両手に銃を構え、勇気を狙い撃つ。

このままでは針のむしろである勇気は、背中のブレイブシールドを手に取り防御に徹する。シールドで銃弾は防がれ、シールドエネルギーの消費も微々たるものであるが、これが積もれでいずれエネルギーは0となり、負けるのは確実に勇気であつた。（く、どうする!?）のままでは負ける！

悩む勇気であつたが一つの決断を下す。“特攻”。その一言であつた。

勇気が飛び込もうとしているのは銃撃の嵐。だが遠距離武装がない自身にとつて、今はこれしか策がなかつた。

覚悟を決めシールドを片手に勇気は簪へ突撃した。

簪も予想していたのか、高威力であるライフルへと切り替える。シールドで数発防い

だものの片手では防ぎきれず弾かれシールドは空へと舞う。

無防備にさらされえる勇気に振り注ぐのは、慈悲無き弾丸の嵐。オメガのシールドエネルギーは見る見るうちに減つていき、このままでは簪にたどり着くまでにゲームセットであつた。

『このまま負けてられつかよおおおお!!』

シールドが飛ばされ、銃撃にさらされ、恐怖もあつた。だがそれ以上に負けたくはないかつた。憧れのＩＳでの初の戦闘。俺とオメガはまだまだやれるという思いが勇気の内に溢れていた。精神を研ぎ澄まし視界がクリアになる。

そこから勇気とオメガの快進撃が始まつた。まるで銃弾がどこから来るのかわかるかのように回避し、簪に接近していく。

「な…………!?」

簪もその様子に驚きながらも、さらに銃撃をうち続ける。

そしてついに勇気は、簪を射程圏まで捉える。

『うおおおおおおおお!!』

雄叫びをあげ、勇気はドラゴンキラーを振るかぶり、ライフル目掛けて振り下ろす。簪も堪らず、ライフルを取りこぼす。そして勇気は残つた右手を振りかぶり、一撃を入れようとする。

(獲った!!)

簪の両手には何もなく防御も間に合わない。この拳は確実にあたる。そう勇気は確信する。…………そのはずだつた。いつの間にかに簪の手には銃が握られ、自身に向けられている。勇気はそれがなんなのか知つていた。

(高速切替……だと!?)

勇気に走る衝撃。銃弾が勇気に直撃し、その衝撃で勇気の体が吹き飛ぶ。そして力なく墜ち、地面にたたきつけられた。

〈試合終了。勝者、更識簪〉

ブザーが鳴り、試合の勝者の名前が鳴り響く。空を舞う勝者と、地面に墜ちる敗者。その明暗が今ここにはつきりと分かれた。勇気の完全なる敗北という形で――

1

試合が終了し、とある待機室。勇気は頭にタオルをかぶり、椅子に座り下に向いていた。負けた直後は頭が呆然としており、その後どうやつて戻ってきたのかさえ覚えていない始末であった。だが確実に言えること。それは勇気の敗北。それだけであった。

部屋のドアが開き、誰かが入つてくる。楓であつた。勇気の様子を見て楓は勇気の隣に静かに座つた。勇気は何も喋らない。話を切り出したのは楓の方であつた。

「今日の試合、残念だつたわね。でもいつまでそうしているつもり?」

黙つたままの勇気、だが少ししてぽつりぽつりと言葉を発した。

「…………おれ、俺は、もしかしたら己惚れていたのかもしれない。自分の憧れのＩＳに乗
れて、それが男で初めての事で。俺は選ばれた人間だつて。強い人間だと錯覚させられ
た」

「」

「でもそんなことはなかつた。己惚れ、その結果が今回の負けで、現実を思い知らされ
た。これじゃあせつかく俺を選んでくれたオメガにも申し訳が立たない。俺はまだま
だ弱い…………！」

勇気の瞳からは涙が流れていた。試合に負けたこと。自身の弱さ。そして何より、そ
の弱さで自身のパートナーであるオメガの力を引き出すことができなかつたこと。全
てが悔しかつた。

「――それで弱い君はこれからどうするの?」

「俺……おれは…………。強く、強くなります!これからもたぶん負けると思うけど、絶対強
くなつて、こいつのパートナーとして相応しくなつて見せます!」

涙を拭いてタオルを振り払う。勇気は立ち上がり、高らかに宣言する。これからどん
な困難があろうとも決して屈しはしないと心に誓いを立てて。

「お見苦しいところを見せてすみませんでした！それと、話を聞いてもらつてありがとうございました！」

「いいえ。生徒の悩みを聞くのも私の仕事でもあるから。じゃあ、勇気君が強くなるためにこれからもつと厳しくしていくから、覚悟しておいてね」

「あはは……。これからもよろしくお願ひします、楓さん！それでは、俺はこれから着替えてくるんで、それでは」

そう言つて勇気は部屋を出ていく。

「うん。勇気君なら。いいえ、勇気君とオメガならきっと強くなれる。わたしよりも。そして誰よりもきっと、ね」

初めての戦闘は勇気にとって苦い経験となつた。だがその経験がきっとこれらの糧となつていく。弱く、負けることも多々あることだろう。そしてそのたびに勇気は成長していく。まだまだ、彼は走り出したばかりなのだから。

勇気とはドームの反対側のシャワールーム。そこには更識簪がいた。そこで思い出されるのは、今回の対戦相手、オメガであつた。
(今回の対戦相手、普段戦っている人たちと比べてもそう強い部類ではなかつた。でも最後、動きが変わつた)

簪があそこで近寄られ銃撃を外すことなど、なかなか経験のない事だつた。自身が勝つたことには変わりはない。しかしそのことが強く気がかりであつたのだ。

「オメガ……か」

この日、簪の心にオメガとその搭乗者のこと、強く印象に残すことになつた。

6話 ワンオフ・アビリティー

ISO

6話 ワンオフ・アビリティー

勇気の初戦から幾分か時間が流れ、勇気のスケジュールは訓練と座学、そして試合といつた具合に管理されるようになつた。

勇気の訓練と座学はいつも通り、いやあの対戦以来さらに厳しさを増していた。勇気が失態なりすると、普段の楓からは考えられないほどの勢いで怒鳴り散らされることもあつた。だが訓練以外の楓は以前以上に勇気に構うようになり、そう言つた意味では、バランスが取れているのかもしれない。

そして試合に関してなのだが――、初戦以来、連戦連敗の日々が続いていた。相手が接近型の場合は良い勝負をすることも度々あつたが、遠距離型となると、なかなか懷に入り込めず、時間切れ、もしくは勇気のエネルギー切れという結果に終わっていた。だからか、勇気は遠距離型に少し苦手意識を持ち始めてしまつた。

それではいけないと、勇気に遠距離型の苦手意識を克服するために、楓自身が勇気と対戦することもしばしば行われるようになる。遠距離型への間合いの取り方から、銃の性質、その発泡スピードから、到着地点の割り出しなど、みつちりと内容の濃い訓練が続いた。

その甲斐あつてか、もしくはようやく今までの努力が実つたのか、やつとの思いで初勝利を掴むことに勇気は成功する。たかが一勝。されど勇気にとっては重い、大きな一勝であつた。その時の勇気のはしやぎ様は年相応のもので、あまりの騒がしさに、またもや源内に殴られる始末であつた。

何度もくじけそうになり、途中で投げ出したくなつた。だがあの日の敗北が勇気を奮い立たせた。これらの敗北の経験が勇気を劇的に成長させることになる。時には負けることもあつた。だがそれ以上の勝利により、ようやく勝率を五割台にする。最初の連敗を除けば、勝率八割台という驚異的な数値であつた。

数ヶ月の間、苦しい時期であつたがようやくその芽が出始めたのである。

そして時がさらにすぎ、春。勇気も今年で中学3年になり、あと1年でI.S学園に入学というまでとなつた。現在勇気は春休みであり、今日もいつもの研究所に訪れていた。午前の座学を終え、勇気は食堂に脚を運んでいた。

食堂はなかなか広く大学のラウンジの内装を思わせるものであつた。昼休みのため

か、研究員や職員たちでなかなか賑やかである。

「おばちゃん、B定食お願ひします」

「あいよー、いつものように大盛りにしておくからねえ」

「ありがとうございます！いつもすみません」

「いいのよ、食べ盛りなんだからしつかり食べなさい」

今ではすっかりと馴染み深くなつた食堂で昼食を受け取る。このおばちゃんは、自身にも勇気と近い年齢の子供がいるため度々良くしてくれるので。勇気の性格と年齢からか、研究所で働く人は皆良くしてくれるのである。

食堂のおばちゃんにはもちろんのこと、研究所の大部分の人たちからは勇気がIS操縦者であることを知られてはいない。名目上では、研究員の卵としてこの研究所に通っている。そのため、座学でも本来IS学園でも整備科の生徒が習うようなことを教わつてているのである。

彼を知り己を知れば百戦して危うからずという言葉があるようだ。ISでも同じことが言える。ISの内部構造、状態、消耗度等を理解できれば、その時の戦術に組み入れることも可能である。それは敵機体にも言えることである。座学を通常の生徒以上に修めることが、勇気の成長をより向上させていた。それが現在の勝率につながっているとも言えるのである。

勇気が席に座り、熱々の食事をいただく。本日のB定食は和食を中心としたメニューだ。勇気がいるこのIS国立研究所は国内でも上位に位置する研究所である。そのためか、研究員のやる気の向上のため、食事はかなり良質な食材をふんだんに使われている。それを勇気は無料でありつけるのだからおいしい話だ。

「隣、いいかしら？」

不意に、勇気の耳に入る声。焼き魚を頬張りながら振り向くと、そこには楓の姿があつた。特に拒む理由もなく、勇気は快くそれを受け入れた。

楓の食事は所謂レディース定食であつた。低カロリーの食材を中心としながらも、しつかりとバランスの良い女性職員には人気のメニューである。

楓も席に着き、食事を摑り始める。その中で勇気とも談笑するのだが、今では割と見慣れた光景である。この中に源内やオメガ研究チームの人たちが入ることもしばしばであつた。

勇気と楓が話す内容はISのことはもちろん、勇気の学校のことや何気ない日常会話などである。年の差はあるもののそれほど離れているわけでもなく、話題には大して困ることはなかつた。その中で、勇気が楓によくからかわれるのとはご愛嬌である。

そして本日。世間話はほどほどに、楓から話を切り出してきた。内容は今後の模擬試合についてであつた。

「今度の土曜の試合についてなんだけれど、今回は私から伝えたほうがいいと室長からのお達しがあつたから伝えるわね。それで今度の相手なんだけれど——」

勇気の喉がごっくんと鳴る。しかしそれは緊張からのものではなかつた。単に食事を飲み込んだ音である。話自体は真面目に聞いているが、あまり締まらない光景だ。

「——元代表候補生がその相手。それも私がよく知つてゐる、ね」

意味深げに言う楓。よく知つてゐることとは、同じIS学園に通つていた同級生だろうかと勇気は予想を付ける。

ここで代表候補生という言葉が出てきた。勇気はこの半年で順調に腕を上げてきた。傍から見れば驚異的なスピードで。そんな中で幾度か日本の現代表候補生達とも対戦した経験があつた。候補生でもレベルの差が有る。勇気も成長したとはいえ、代表一步手前の候補生には負けを喫した。しかし、下位の候補生には勝利を収めた経験があつたのである。

そんな中での今回の試合である。候補生レベルともなると、なかなか対戦する機会が少ない。そんな貴重な経験のため勇気の心はワクワクしていた。

「それで、その人は強いんですか!」

「ふふ、ええ。私とIS学園の同期であり、普通科の主席。操縦センスはピカイチね。私なんて相手にもならないくらいね」

興奮気味の勇気に苦笑しながらも、質問に答えていく。楓も今では勇気とはよく対戦するが、最近は勇気の勝利が多くなつてきていた。楓もI-Sの操縦はできるものの、メインは研究、整備である。その楓にすべてを求めるのは酷であろう。そのため楓は考えていた。今の勇気に必要なものを。

楓はその模擬試合の時間や必要なものを勇気に伝え、その話を切り上げた。そして再び、食事に戻ると思われたのだが、ある言葉を勇気に落とした。

「それはそうと、勇気君。彼女できた？」

何気ない一言であつた。だがそれは勇気にとってはただの爆弾でしかなかつた。一瞬の沈黙が勇気と楓の間に流れる。周りは食事をしている人たちの声音で騒がしく響く。1秒、2秒と時が過ぎていく。おーい、もしもーし、と楓が勇気の眼前で手を振るう。

「——な、ななな、何を聞いてるんですか貴女は!!」

立ち上がり、勇気の大声が食堂内に響き渡る。何事かと人々の視線が勇気を中心に集中する。流石に居心地が悪いのか、周囲に小声で謝り、静かに席に着く。案の定、勇気の顔はまるで林檎の如くであつた。

「えー? だつて勇気君からそういうつた話聞かないし。室長も知らないみたいだから。こ^こはお姉さんとしてはやつぱり知つておく出来かなーと」

先程と何も代わりのない声色で勇気と話す楓。まるで先の視線の集中を、物ともしていな様子である。

そんな楓に対して、勇気は頭をしつちやかめつちやかにかき回す。心を無理矢理に落ち着かせ、食事を口にする。動搖しているのは丸分かりではあるが。

「……別にいませんよ。仲のいい友達とかはいますけど、その――彼女とかそういうたのはいませんから！」

先程よりボリュームを下げて渋々といった様子で話す。無理に話題を変えようとしても無駄だと今までの経験でわかつているのだ。

「ふーん。勇気君って結構女の子受けよさそうなのに。もつたいない」

「別に、俺はモテませんよ。それにオメガのこともあつて彼女なんて作る余裕もありませんから」

勇気自身彼女が欲しいと思うことも確かにあつた。思春期の男なのだから当然である。だが、ISオメガの事が有り、今はそれに手一杯である。さらには、もし彼女が出来たとしても、勇気の性格上オメガのことを隠し続けることは気が引けることにもある。それが原因で別れるなんて可能性もある。そういうた要因もあり、勇気は彼女を作ろうとは考えていなかつた。

実際に勇気がモテるかについては、楓の言う通り、それなりに学校内では評価がいい。

顔、性格共に悪くはなく、運動神経もよく、勉強もできる。分け隔てなく接するため、男女ともに勇気の評判はいいものである。少し正義バカで燃え易いのが玉に瑕ではあるが概ね良好と言えた。

「そう。……じゃあ、私と付き合つてみる?」

「——は、え、うえ!」

少し落ち着いてきた様子の勇気にさらなる爆弾が投下される。既に勇気の耐久値はズタボロであった。もうライフは0である。そんな勇気を面白そうに眺めながら、楓は言葉を続ける。

「自分で言うのもなんだけで、顔も悪くないと思うし、スタイルもなかなかだと思うんだけどなあ。ほら、勇気君つて年上好みだし」

確かに勇気にとって楓は憧れの年上お姉さんであつた。今では普通に接することができるが、初めは緊張しつぱなしであつた程である。そんな人から告白まがいなことを言われた勇気の様子は言うまでもないだろう。

勇気の様子に少しやりすぎたかと思つた楓は、苦笑しながら勇気にデコピンをかます。

少し時間をおいて、楓にからかわれたと理解すると、赤らめた顔で楓を睨み（全く怖くない）、食器を片付けそそくさと退散した。そんな勇気の様子に楓もからかいすぎた

と反省する。それでもからかいは源内と同様やめないであろうが。

ひと呼吸付き、楓はとある資料を見ながらコーヒーを飲む。その様は先程と打って変わつており、まるで雑誌のモデルのようである。その資料は次の勇気の模擬試合の内容であつた。

(勇気君は凄まじいスピードで成長している。もう私では壁としての役割が果たせなくなつてきているくらいに。今この子の成長のためにも大きな壁が必要なの。だから真耶、お願ひね)

楓が持つ資料の対戦相手欄。そこにはこう書かれている。

元日本代表候補生 現 I S 学園教師 山田 真耶
と。

天候は春うららかな様子で、絶好のお花見日和といった今日この頃。とある会場ではそんな様子は微塵もなく、張り詰めた様子で佇む、2機の I S がそこにはあつた。

片方は黄とオレンジの外装に巨大な手甲型のクロ一、背には羽のような盾。竜を催したようなフェイスガードをかぶる人物。勇気とオメガである。

そしてもう片方はといふと、全体的に緑の装甲。フランス、デュノア社で開発された第2世代型汎用機、ラファール・リヴィアイヴに搭乗する山田真耶。

両者ともにスタート位置につき、合図があるまで待機状態にあつた。勇気は今か今かと内心子供のように心躍つていた。山田真耶についてはあまり情報がなかつたため、どう出るかはわからなかつた。だがIS学園1期生にして代表候補生だつたならば、その時代表だつたあの織斑千冬とも関わりがあるだろうという予想がつく。その候補なのだから強いのだろうと想像し、胸を高ぶらせるのであつた。

『初めまして。本日はお時間を割いていただきありがとうございます。故あつて情報を晒せないことをお許し下さい』

「あ、いえいえ。こちらとしてもこの休み期間に、ISを動かすことは有意義ですか。それに今、国中で話題のオメガと戦えるなら光榮です」

勇気は幾度となく繰り返された挨拶を慣れた具合に行う。そんな勇氣に対し、ほんわかとした雰囲気で返す童顔の女性。彼女の名前は山田真耶。メガネをかけたその容貌は美麗な部類に入り、美人というよりは可愛いといった風貌だ。そして、勇気がなるべく見ないようにしている彼女の最大の特徴、巨乳である。そのアンバランスな具合が逆に彼女の魅力を高めているのかもしれない。

閑話休題。さて、オメガが国中で話題になつてているという話だが、それはある意味当然の帰結と言えた。今まで誰にも反応しなかつたIS、オメガ。それを起動させることができた人物。その人物についての情報は遮断されており、その強さは最近では候補生

レベルに差し掛かっている。そういうた理由でオメガは日本ＩＳ界において話題の中心の1つなのだ。

『あ、はは…。期待にお答えできるかはわかりませんが、全力で挑ませていただきます！』

「はい。こちらこそ宜しくお願ひしますね」

会話をしながら、勇気は現在の対戦相手について思考する。ラファール・リヴィアイヴは格闘から中距離戦など広い範囲までこなせるバランス型のＩＳだ。特にタッグマッチを行う際、支援に集中させれば味方とすればこれほど心強いものはないだろう。

そんな機体を選択している真耶。勇気は、相手はおそらく中距離戦を得意としていると予想する。日本には純国産のＩＳ、打鉄が存在する。接近戦が得意であれば、日本人であればその大多数が打鉄を使用していることを勇気は経験で理解している。そんな理由から下手すればオールラウンド型かもしれないが、可能性として高い中距離型と予想したのだつた。

開始前の合図が鳴り、お互い会話をやめる。春の日差しが2機を照らす。普段であれば心地よいものであるが、今の勇気にはそんなことを考えなかつた。直前の緊張感が心地よく神経を集中させる。

そして、ブザーがドーム内に響き渡る。試合の開始である。

最初に仕掛けたのは真耶であつた。ラファール・リヴァイヴの標準装備である、五十口径アサルトライフル『レッドバレット』を素早く召喚し、勇気に向けて発砲する。

勇気も銃弾を見定めながら、その高められた神経で空中を縦横無断に駆け巡る。相手武器の性質からどのタイミングで避けるのかを頭の中で高速で読み取り回避していく。半年ほど前では想像につかない程の成長を見せる勇気。反撃とばかりに真耶へと詰め寄る。弾倉が途切れる隙を狙い一気に直進。

それに対しても真耶もわかつていたように、接近戦用の銃剣に切り替える。そして勇気が真耶をその射程に捉える。

銃剣とドラゴンキラーがぶつかり合う。その衝撃で火花が飛び散り、互いに硬直状態になる。

その均衡を破つたのは勇気であつた。機体性能と中学生とは言え、男性のパワーで押し切り、回し蹴りを加える。

その回し蹴りに対し、真耶は盾装甲を使うことで、遠心力のかかつたその蹴りを受け流すと同時にその力を利用し、後ろへ後退する。

回し蹴りが受け流されたことを理解した瞬間に追撃にドラゴンクロールを振り上げた勇気の攻撃は空を切ることになってしまった。

「ふう、危ないところでしたー。やりますねー、オメガの操縦者さん！」

『……あれを回避する人がよく言いますね。こちらとしては決まって欲しかったんですが』

「ふふつ。私としても先達としてそうそう負けるつもりはありませんからあ。それではそろそろ行かせてもらいます！」

少し雰囲気の変わる真耶。それに対し悪寒がした勇気はサイドステップを取る。風を斬る音が耳元から聞こえ、それが銃弾であることを理解し驚愕の目で真耶を見つめる。

そこには、外してしまいましたかーといつた具合にライフルを構える真耶の存在が確認された。

「次は外しませんよー」

ゆるい声であるが、勇氣にとつては最後通達に等しかつた。急いで距離を取ろうとバーニアを蒸す。この場にとどまることは蜂の巣にされるも同義であるのだから。

冷や汗をかきながら、高速で空中を飛び回る。しかし、まるで動きが読み取られているかのように、弾丸は勇気めがけて飛んでくる。

それをなんとかドラゴンキラーの手装甲で防御し、受け流す。それでもすべてをいなす事はかなわず、数発被弾してしまう。まるで先程とはレベルの違う銃撃に戸惑いなが

らも、頭を冷静に保ち、飛び回りながら思考する。

（・・・おそらく最初は様子見。こちらの出方を伺いながらことを構えていたのだろう。そして、こちらの接近能力を一目見てから、あちらの本領である射撃戦に持つていつたつてところか）

正確な銃撃にシールドエネルギーは削られてゆき、この状況を打開するためブレイブシールドを開幕し、飛来する銃弾を弾きながら飛行する。

（相手の射撃能力は今まで戦ってきた中でもずば抜けている。これを搔い潜り接近戦に持ち込むのは至難の業。もしこれを抜けてもあちらはあの体捌きからしてオールラウンダー型。ならば！）

突然勇気は空中から下降し、地上へ降り立つ。そしてグラウンド全体を高速で動き回り出す。

勇気の奇行に真耶は少し訝しめながらも射撃する手を緩めない。次々と放たれる弾丸は勇気のシールドに弾かれながらまたは回避されながら地面へ飛んでゆく。

これも勇気の狙いの一つであった。ISに使用される弾丸は人間仕様の通常より威力が高く衝撃が大きい。その弾丸が地面に叩きつけられれば砂埃が舞う。そして勇気が地を駆け回るのもそれが理由であつた。

オメガは陸海空全てにおいて力を發揮する。そして地上において他のISとは比較

にならないほどの陸戦能力が備わっている。その能力を十分に発揮し、高速で駆け回ったことで地上は今や砂埃まみれで視界も十分には見えなくなる程になつていた。

確かに、砂埃程度では I-S の視覚補佐機能であるハイパーセンサーを誤魔化することは難しい。しかし、搭乗するものはあくまで人間である。ハイパーセンサーである程度の位置を把握できようが、人間の物を理解する脳内処理のパーセンテージは視覚に大きく依存する。それを利用し、一時的に視野の妨げによる銃弾命中率を下げようとしたのだ。

真耶もわずかに見える動きから銃弾を放つも当たる様子がない。

「なるほど、考えましたね。ですがそちらには遠距離武器がないことは確認されています。一体どうするつもりですか？」

『――』

オープンチャネルによる勇気の真耶に対する返答は沈黙。弾丸と驅ける音だけだつた均衡は幾分か続いた。だが不意にそれが破られることとなる。

「?」

突如、真耶の正面から飛来する物体。それが何か一瞬わからなかつたものの、冷静に打ち落とす。一体なんだつたのか。それは勇気のブレイブシールドであつた。だがそれを真耶が理解する前に背後から現れる機体。オメガである。

勇気は真耶の正面にブレイブシールドが行くようにブーメランのように投げつけ、その不意を付き、死角である背後から奇襲したのだ。

その鋭利な爪で真耶を背後から切り裂こうと高速で接近する。

!!!!

そして、激しい衝撃が場内に木霊した。その様子を見ていた誰もが勇気の攻撃の命中を予想した。

だが命中したのは勇気のドラゴンキラーではなかつた――。

勇気も一瞬のことで何が起こつたのか理解できずにいた。だが、真耶の姿を捉えて全てを理解する。背を向けたままの真耶の姿。しかしその右方向に回された左手には、こちらに向けられたハンドガン。

(ぐつ、まさか、こちらを見ずに反撃してくるとは。ははつ、こりやあまいつたな……)

そんな弱気な発言を内面にこぼす勇気。それも仕方ないのかもしれない。必殺を疑わなかつたその一撃はあっさりと返されてしまつたのだから。シールドエネルギー以上にその精神の方がダメージが大きかつた。

(これで元代表候補生? いや違う。候補生レベルでは今のが攻撃に反応は出来ても精々回避するのが精一杯なはず。恐らく読まれていた……! でなければあの銃撃はありえない! 銃撃のセンスに体術、そしてこちらの数手先を読むその戦術力。山田真耶――彼

女は恐らく国家代表クラス!!)

真耶の実力に戦慄する。真耶の能力はかのブリュンヒルデ、織斑千冬が認めるほどの腕前である。公式試合など真耶が緊張する場面ではその力が發揮されないため、あまりその実力は周囲に知られる事とはなかつた。それがなければ国家代表になれたかもしないほどの実力者であつたのだ。

墜落していくオメガを眺めながら、追撃はせず、その様子を眺める真耶。その額には汗が浮かんでおり、代表レベルを持つ真耶にとつても勇気の攻撃は冷や汗ものであつたらしい。

(先程の攻撃は見事でした。わずか半年でここまで力をつけているとは流石、楓ちゃんの教え子といったところでしょうか。いえ、それ以上に努力とそのセンスによるところが大きいのでしょうか)

試合前に楓から話された言葉を思い出す真耶。

『手加減抜きで負かして欲しい…………ですか？』

『ええ。あの子に今必要なもの。それは大きな壁。あの織斑さんと渡り合えるほどの実力を持つ真耶なら、きっとその役目にふさわしいはず。私ではもう実力面では限界が近いから………』

そう少し悲しそうにそして誇らしげに言う楓。恐らく今の教え子がよほど可愛いのだろう。真耶自身、教師の身だから楓の気持ちが痛いほどわかるのだ。そして楓がその教え子を自分に託そうとしている。ならば、真耶の答えは自ずと出てきた。

『分かりました。私がきつちりとその子を負かせてあげます！だから任せてください、楓ちゃん』

『ふふっ、じゃあ安心ね。あの子のためとはいえ、負かすよう頼むなんて、嫌な大人ね、私』

『そ、そんなことないですよ！その子のためにわざわざ私に頼むくらいですから。楓ちゃんはいい人です！私が保証します！』

『うん。そう言つてくれると助かるわ。ありがとう、真耶。それとお願ひね』

『ええ！大船に乗つたつもりで任せてください！』

『…………なんだか急に不安になつてきたわ。真耶つてちょっと抜けているところあるから』

『ええー、何ですか？私だつて今や教師として立派に成長して――』

笑いながら真耶をからかう楓。そんな距離感が彼女たちにとつてはちょうどいい間柄なのかもしれない。

『ああそれとね――――――』

そして、場面は試合会場に戻る。真耶があえて追撃しなかったのは、勇気の成長のためであつた。次につながる戦い方。そして最大限の力を発揮させて負かすのが理想的であつたのだ。そして楓の最後の言葉が脳内に蘇るのである。

『――もしかしたら、面白いものが見られるかもしれないから、油断したらダメだからね』

楓の意味深な言葉。それがどのようなことを意味しているのかは真耶には理解できなかつたが、油断なく勇気に対し構えるのであつた。

常人ならば実力差に打ちひしがれ、絶望する状況であるが、勇気はそうではなかつた。むしろ興奮していた。これほどの相手と出会えたことに。代表レベル、今の勇気の数段上を行く実力者。まさかもう対戦できるとは思つていなかつた勇気は歓喜に内心震えていた。

(ははっ、楓さんも粋な計らいをしてくれる!――それにしてもこの状況どうしようか)

楓に感謝しながらも、今の状況は際どいものだつた。必勝の策も真耶には通じず、シールドエネルギーもあまり心もとない。だが諦めるつもりは毛頭ない。そう、どんな状況でも諦めることなんてないのだから。

(そうだ。自分をそしてオメガを信じろ！相手がこちらの数手先を行くならそれすら読み取れ！もつと速く動くんだ。もつと早く思考しろ。もつと、もつと速く……!!)

覚悟を決め、あらゆる雑念をクリアにする。あの感覚が蘇る。今まで感じることができなかつた、あの敗北を期した時に感じた感覚が。

不意に網膜投影された視界に映し出された画面。そして脳内に流れ込む情報。それを理解したとき、勇気に笑みがこぼれる。

(ありがとう、オメガ―――！)

長いようでほんのわずかな沈黙であつた。真耶に視線を向け、その闘士を剥き出しにする。

勇気の様子を察した真耶はライフルを構え、銃撃体制に入る。何かが変わつた。それが何か掴むことはできないが、油断できるものではなかつた。

勇気の動きを予想し、放たれる弾丸。だがそれは既のところで回避される。

「つ!!」

まるでこちらの考えが読まれているかのように、受け流される。そのことに驚きながらも、真耶は次弾を装填する。だが次の瞬間、真耶をさらに驚かせることになる。

突如顯われた、オメガの手のひらに浮かぶ、炎。手のひらサイズであるものの、この

距離からでさえ感じる威圧感。

真耶の脳内に警告が鳴る。あれは直撃していいものではないと。その警戒は正しいものであるとすぐに思い知ることとなる。

オメガから放たれる炎弾。そのスピードは銃弾そのもの。だが躊躇ないほどではない。迫り来る炎弾を回避することに成功する。だが突如鳴り響く轟音。後ろをバツと振り向く真耶。その惨状に驚愕する。

闘技場を保護するバリアが破られているのだ。あの小さな炎弾にどれほどの力が込められているのかは、それを見るに明らかであつた。

急いでオメガがいた位置に視線を向ける。だがその存在は確認されなかつた。

そして向けられた視線。真耶の斜め上の空中にオメガは佇んでいた。先程とは比べ物にならないほどの大きさの炎弾を掲げて。

(しまつた!!)

致命的なミス。回避するには厳しすぎる状況。だが真耶も諦めるつもりはなかつた。友人との約束。そして自身が積み上げてきたキャリアから最良の判断を下す。

勇気は始めの炎弾を打ち出すと同時に、空中を駆け抜けた。自身のシールドエネルギーは心もとなく、相手はほとんどノーダメージに等しかつたのだ。故に仕掛けるのならばこれが最後の賭けであつた。

瞬時^{イグニッショングースト} 加速^{ブースト}を利用し高速で駆け抜け、自身の必殺の一撃を繰り出す。

真耶がこちらに気づいたが、もう遅い。オメガから受け取った新たな力を言葉に紡ぐ。その名は――

『ガイア・フォース!!!!』

大気中、そして自身のシールドエネルギーを消費し、それを凝縮させた超高熱の弾丸。オメガのワンオフ・アビリティー、ガイア・フォースがついに発動したのだ。

結果だけ言うならば、勇気の敗北で終わつた。ガイア・フォースは確かに真耶に命中した。だが、そのシールドエネルギーを削り切るには至らなかつた。

ガイア・フォースは強力なワンオフ・アビリティーである。それこそ、かの織斑千冬が使用する零落白夜に匹敵するほどに。

零落白夜は自身のシールドエネルギーを消費し、相手のエネルギーを消失させる、一

撃必殺の能力である。そしてガイア・フォースもそれに近い性質を持つ。自身のエネルギーを消費する諸刃の剣という点は同じ。しかし違うのはダメージという点。零落白夜の一撃必殺に対し、ガイア・フォースのダメージはその消費されたシールドエネルギーに依存する。

エネルギーを半分ほど消費すればそれこそ一撃必殺という威力を発揮する。それは零落白夜の劣化版ではないかと思われるが、そうではない。零落白夜はエネルギー消費が激しく、使い続ければそれこそすぐにエネルギーがなくなる。使いどころが難しい難点がある。それに対しガイア・フォースは、最小のエネルギーで炎弾を作り出すことも可能であり、小回りが利く利点が存在するのだ。

話は戻して、なぜガイア・フォースは真耶に当たったのに、勇気が敗れたのか。それはまず真耶の行動にある。真耶は瞬時にリヴァイヴの内装されたシールドを引き出し、防御に徹した。シールドは破られたものの、そのおかげでエネルギー全損は免れる結果となつた。もしエネルギーがもう少し残っていたならば結果は逆であつたかも知れないが、所詮は無い物ねだりである。

そしてほぼすべてのエネルギーを使い果たした勇気は真耶の弾丸の一撃で敗れることになつた。

勇気は先程まで激戦を繰り広げていた闘技場で寝転んでいた。真耶とは二言三言話

し、大変貴重な経験が出来たとお礼を言い別れた。なんだか少し申し訳なさそうな真耶の顔が印象的であつた。

今は今回の反省会と発現したワンオフ・アビリティについて考えを巡らせていた。結果的には自身の負けであつた。しかし、得るものもまた大きかつた。まだまだ技術的に敵わない部分が多いことを今回改めて思い知らされた。だがそれと同時に、自身の成長の余地が大きいにあることも感じた。思うところが多くあつたが結果的には良かつたと勇気は思う。

太陽に手をかざし、拳を握り締める。

『俺はまだまだ強くなれる…………！』

日差しが勇気を照らし、改めて春の陽気を感じるのだった。

「お疲れ様。真耶。どうだつた、あの子。なかなかのものでしよう？」

笑みを浮かべながら真耶に話しかける楓。その様子に苦笑気味に返すしかない真耶。

「あ、はは。楓ちゃんの言葉がなければ、危なかつたかなあ。まさかここまで追い込まれるとは思いませんでしたあ」

「ふふ。そろそろだとは思つていたけれど、あの場面でワンオフ・アビリティを発動させるとは、私も思わなかつたわよ。ありがとう、真耶。あの子の力を引き出してくれて」

「い、いえいえ！私は何もしてませんよ。むしろ、あのような醜態を晒してしまつて申し訳ないくらいなんですか？」

「いいえ。確かにあの子の力によるものが大きいけれど、貴女という強敵がいたからこそだと思うから。素直に感謝を受け取つておきなさい」

「はあ、分かりました。楓ちゃんは強引なんだから」

笑い合う2人。互いに美人であるため大変絵になる光景である。

「あ、今日飲みに行かない？ワンオフの解析はあの子の状態から見て明日からだから、久々に行きましょうよ」

「ふふ、いいですね。今日はもうオフですから大丈夫ですよ」

この後、2人は夜の街で飲み明かすのだが、大抵が楓の勇気の自慢話となり、真耶にとつてはたじたじの飲みとなるのだが、そのことを真耶はまだ知らずにいた。合掌。